



イマジン
ロータリー

RI 会長：ジェニファー・ジョーンズ

2620 地区ガバナー：浅原 諒蔵

会長：山城 一哲 幹事：栗原 伸夫 会場監督：植山 和人

例会：毎週金曜日 19:00 - 20:00

グランドホテル浜松 〒432-8507 浜松市中区東伊場 1-3-1 Tel: 053-450-3003 Fax: 053-450-3006

E-Mail: hamamatsu-naka@ri2620.gr.jp

2023年1月27日（金） 晴 第1609回例会 週報 NO. 22

司会：竹内公一 会場監督補佐
点鐘：山城一哲 会長
ロータリーソング
「手に手つないで」

ゲスト

RI 第 2620 地区静岡第 5 グループ
ガバナー補佐 坂田 茂様
G 補佐事務局長 上田 昌宏様

会長挨拶



本日第 3 回ガバナー補佐の訪問です。RI 第 2620 地区静岡第 5 グループ IM は 2 月 26 日グランドホテルにおいて 3 年ぶりの開催となります。IM のテーマは「みんなが幸せになる経営」ということで楽しみにしています。

例会前、2 回目のオリエンテーションを行いました。先週、ロータリアンの義務（会費の納入・例会出席・ロータリーの友の購読）の説明をしましたが、奇しくも、ガバナー補佐から本日または次回お話を頂けるといことです。

今週の 25 日、江之島高校ポスターコンクールの表彰式がありました。今日は午後、ロータリー会員手帳の方向性について、4 RC（西・東・中・ハーモニー）の会長が集まり話し合いをしてきました。明日は浜松志耀 RC の認証伝達式です。

残念な報告です。ご本人の都合で

会員の金原さんが 12 月末付けで退会となりました。

今日は会員卓話です。楽しみにしています。

幹事報告



- ・配布資料・・抜粋のつづり
- 江之島入賞作品ノート
- ・次回例会終了後、理事会です。
- ・次週は天竜浜名湖鉄道（株）伊藤様の卓話です。

委員会報告

*中村将義 会員増強委員長
会員募集をしています。例会見学も歓迎しています。

また、会員増強用にカードを作成予定です。原稿を回覧します。

スマイル

♪山城一哲さん、栗原伸夫さん

本日は坂田茂ガバナー補佐、上田昌宏事務局長にお越しいただきました。お忙しい中ありがとうございます。

そして卓話の岩田直也さん、本日はよろしくお願い致します。



ガバナー補佐ご挨拶

*坂田茂 ガバナー補佐



本年皆様にお会いするのは初めてですので、新年おめでとうございます。本年もよろしくお願い致します。このように皆様と新しい年を迎えることは、健康であるということ、感謝しております。

ここ 2～3 日の大変な寒さで、日本海側では交通に大変苦慮しているようです。これからまだ寒さは続きますから、健康にお気を付けください。新型コロナ感染対策にも十分気を付けられ、益々のロータリー活動に専念されることを願っております。

皆様もご存じのように静岡第 5 グループに新しいクラブが加わります。浜松志耀 RC で会員は 25 名、10 月 26 日に RI より認証され、明日発足式を予定しています。毎週木曜、朝例会をオークラで行うそうです。

また、西 RC は若い世代のリーダーシップ支援をするインターアクトクラブをオイスカ高等学校と結び、2 月 4 日発会式を行います。

さて、ロータリーの目的は奉仕の理念で結ばれた職業人通し国際理解、親善、平和を推進することにあります。新しくできた志耀 RC とともにこのロータリーの目的に

向かって歩み、活動をしていきたいものです。

今年度の第5グループの活動は、最初に天浜線の清掃、そして花のリレープロジェクトに協力しました。中RCでは6月に活動を行うと聞いております。また、ウクライナ難民支援には多くの皆様からご協力をいただきました。会員増強についても、女性会員が8%となり、志耀RCの発足により、ますます拍車がかかりました。

下半期の行事としては2月26日のIMや新しい問題にもチャレンジし、ロータリーの奉仕活動を活発化させていきたいと思ひます。

＊上田 昌宏 事務局長



本日は早川IM実行委員長に代わってご挨拶致します。ここ数年新型コロナの感染拡大防止に伴い、交流の場が自粛されてきていました。今年度浅原ガバナーは絆を深めてロータリー活動を再開使用をおっしゃっていますので、このIMがまさにその機会ではないかと思ひます。

日程・場所・プログラムはお手元のチラシをご覧ください。皆様のご参加をお待ちしております。

会員卓話 「未来の裁判」

＊岩田直也さん



前回の卓話からちょうど2年になります。2年経ってもコロナ禍は収束せず、寄せては返す波のように私たちの生活に影響を及ぼし続けています。

そして新型コロナウイルスは、裁判の在り方をも大きく変えて

しまったように思ひます。そこで今日は、「未来の裁判」という題で、徐々に整備が進んでいる民事裁判手続のIT化や、AIによる民事裁判の可能性についてお話ししたいと思います。とはいえ、私はその方の専門家ではありませんし、最近の詳しい動きもよく知りません。ただ天邪鬼で、未来と言われると過去を振り返りたくなる性分ですので、江戸時代の裁判の様子にも触れながらざっくりお話しします。気楽にお聞きいただければ幸いです。

さて、コロナ禍が始まる前は、訴状や証拠といった裁判関係の書類は紙に印刷したものを人数分用意して裁判所に提出するのが当たり前でした。そして、少なくとも近くの裁判所であれば、代理人の弁護士は裁判所に行くのが当然でした。最初の裁判のことを「第1回口頭弁論」といいますが、法律上、双方が裁判所に行かなくても良いことになっていますが、とにかく原告の代理人は法廷に行きます。そして、裁判が始まると「原告は訴状を陳述で良いですね？」等と裁判官から言われます。原告の代理人は言われたとおり「陳述します」と言ひます。被告の代理人が欠席だと、次の裁判の日程を決めてこの日の裁判は終了です。「口頭弁論」というと、何やら両方の弁護士が舌鋒鋭く議論を戦わすイメージがありますが、「陳述」という呪文を唱えることで、事前に提出していた書類の内容をその場で全部読み上げたことになるのです。

第1回口頭弁論の次の裁判は、法廷とは異なる裁判所の会議室で、その裁判の争点は何で、その争点に対する当事者の主張や、証拠を整理する手続がしばらく続きます。争点整理手続と言われるものです。この争点整理手続、厳密には原告と被告両方の弁護士が電話で参加することも可能ですが、裁判の都度、裁判所に行くのが弁護士にとっては当たり前でした。遠隔地ならば別ですが、例えば東京の弁護士なら、横浜や埼玉の裁判所ならば来て当然だと、代理人が電話で手続に参加することも容易には認めていなかったようです。

こういった具合でしたが、最近になって浜松の裁判所でも、TEAMSというアプリを利用して、web会議で争点整理手続に参加できるようになりました。更に昨年4月に民事訴訟法により、口頭弁論もweb会議化が可能となり、裁判書類も電子提出ができるように制度が整備されました。

では、何故、今になってIT化が進んできたのか。それを考えるため、そもそもどうして裁判をするのに裁判所に行かなくてはならなかったのか、江戸時代まで歴史を遡ってみたいと思ひます。

この点で大いに参考になるのは、園尾隆司さんという高名な元裁判官が書かれた「民事訴訟・執行・破産の近現代史」という本です。園尾さんは現在の倒産に関する裁判所の実務の礎を築いた方で、東大の落研出身、とにかく話が面白い。以前、静岡地裁の所長をされていた時に講演を聞いたことがあるのですが、あつという間に時間が過ぎたことを覚えています。同じ頃、徳川幕府ゆかりの葵文庫の蔵書を引き継いだ県立中央図書館に通い、研究の成果を纏めたのが、この本と伺っています。

その園尾さんの著書によると、江戸時代、裁判を起こす時には、まず自分が住んでいる町の町役人や地元の名主に訴えの内容を申し入れることとされていました。そして、先に町役人同士で話し合いによる協議がなされ、それでもダメという時に訴状（この言葉は江戸時代からあったそうです。）に町役人が奥書をして、奥書がある訴状だけが当時の裁判所にあたる評定所に受理される。今でも離婚裁判をやるには、必ず先に調停すなわち裁判所での話し合いをやらなければならないとされていますが、そのルーツと言えそうですね。

訴状が受理されると、与力が審査して、形式的なチェックがなされます。これも現在の訴状審査とよく似ています。そして、裁判の日が決められ、いよいよお白洲（法廷）ということになります。ここで注目なのが、裁判に来ないことの罪がとても重いことです。所払い（住んでいる町からの永久追放）

敲き（むち叩き 50～100 回）、重過料（10～20 貫文＝120～240 万円）、輕過料（3 貫又は 5 貫）のどれかです。裁判に遅刻しても罰があり、訴えられた方が来ないときは探し出して連行し、罰を与えたそうです。さらに裁判には町役人も出頭しなければならず、裁判の当事者本人が来ないとか遅刻とかすると、町役人も処罰されました。私も、江戸時代なら 1 度か 2 度は百叩きの刑を受けていたかもしれません。もっとも、我々弁護士は、当時、代言人といわれ、基本的小白洲には出席できなかったようです。とにかく当時の裁判は関係者が全員揃わないと開けない、だから不出頭に対する制裁も重かった。これは明治に入ってもしばらくそのままでした。

その後、民事訴訟法ができて裁判不出頭に伴う罰則はなくなりましたが、今でも民事調停法には不出頭には 5 万円以下の過料を科すという規定があります。江戸時代の名残とも言えそうです。

こうしてみると、現代の裁判にもお奉行と同じような権威主義的精神があったのではないか、だから裁判所に行くのが当たり前だったのではないか。そんな風に思えなくもありません。しかし、そんなお奉行精神を吹き飛ばしたのが、新型コロナウイルスです。

IT 化の議論はコロナ前からありましたが、ここにきて一気に整備が進んだのは、こうした背景があるように思えます。

裁判手続だけでなく、裁判の中身のデジタル化の議論も進んでいるようです。最近では、ODR（オンライン・ディスピュート・リゾリューション）といって、手続を全部オンライン化して、AI が判断を行うという制度が注目されています。ここでクローズアップされるのが過去の判例の取扱いです。

「判例」は、実は江戸時代から重視されていました。八代目将軍吉宗が編纂した「公事方御定書」は各地の評定所の判例をまとめた当時の判例集です。其々の藩の裁判も、御定書に従って行われていたそうです。その結果、だいたい全国どこのお奉行様も似通った

お裁きをしていたというのですから、凄いものです。

明治になっても、しばらくは江戸幕府の制度が引き継がれましたが、やがて民法が制定されました。それでも複雑怪奇な個々の紛争の全てについて、予め定めることはできませんから、やはり判例が大事になってくる。そうして、大事な判例については、今でもデータベースに収録され、私も頻繁に参照しています。ただ、そのデータベースも、裁判所用意のものは収録数が圧倒的に少なく不十分で、現状では民間のものを利用せざるを得ません。契約しているデータベースの判例も、何となく偏りを感じます。

そのため ODR とか、AI を裁判に活用していくには、先ずは網羅的なデータベースが必要になってきます。ところが、判決は、個人情報やプライバシー満載の紙ベースの判決書で残される。法務省が、全記録の電子化の検討を進めているそうですが、いつになったらビッグデータに集積できるのかは分かりません。仮に全判例がビッグデータ化されたにしても、はたして AI が正しく法的判断のアルゴリズムを確立できるのかという疑問があります。

というのも、われわれ法曹の思考過程は、法的三段論法といわれます。〇〇の条件が整えばある条文が適用となるという大前提のもとに、こういう事実があればこの条件を満たすという小前提をあてはめて結論を出していきます。

このうち大前提の部分は、解釈論になる部分は別として、長年の裁判実務や研究の蓄積によって実は既に精緻にプログラム化されている。だから AI の学習に馴染みやすいと思うのですが、問題は小前提の部分すなわち事実認定と呼ばれる部分です。

世の中に言った言わないの揉め事があるから我々弁護士の出番があるわけですが、どのような証拠があれば、或いはどのような状況証拠があれば「言った」ことになるのか、事実認定は裁判官が経験則に照らして行うものですが、人ごとに判断が異なることもあり

得ます。時代が変わることで経験則も変わっていきます。

そのような事件の判決の中には、あれっと思うものがあります。私が察するには、片方の当事者に弁護士がついていない事件で目を引くような判断がなされやすい気がします。一つの例として、銀座のクラブのママがいわゆる枕営業をして、その相手の妻から訴えられたという事件があります。これは枕営業だから不倫ではないと判断されました。ママには弁護士がついていない。しかし裁判官から見てもママを勝たせなければ正義が通らぬという、書類を読んでも分からないような裏事情があったのかもしれませんが。そのような裏事情や、裁判官がよく言う事件の筋といった機微を AI に読み取れるものなののでしょうか。とにかく時代とともに経験則も変わるし、証拠にしても、科学技術が今ほど発達していない時代は、客観的な証拠を出せといっても出しようがなかった。そこを経験則で補っていたように思います。ですから時代背景を理解させずに平面的に判決を AI に読ませて、アルゴリズムを作らせると、おかしいことにならないか、ちょっと心配です。

それからもう一つの問題として、AI に判断された当事者が納得するかという問題があります。よく AI は正しい結論を示すのは得意だが、何故そうなのかという思考過程を示すのは苦手と聞きます。説明のためのアルゴリズムが開発されて将来は克服されるのかもしれませんが、少なくとも AI が出した結論を、裁判官がそのまま判決として言い渡すというのは、絶対に人は納得しないでしょう。裁判というものが人間同士の営みの一つである以上、裁判という作用から裁判官という人が消えることはないと思います。

こんな具合で、まだまだ課題はたくさんありそうですが、それでも私は AI が紛争解決に関与するのは悪くはないことだと思っています。私が時折理不尽に思うのは、裁判官の頭の中がなかなか見えないことです。中には早い段階で「この調子だとこうなりそうだ。」と

言ってくれる裁判官もいますが、裁判官の立場からすると、うかつに話すわけにもいかない。ボクシングのように中間採点を発表してしまうと、勝っている方は調子に乗るし、負けている方はムキになる。話合いがまとまらなくあり、余計收拾がつかなくなってしまうからです。それは分かる。しかし一方で、裁判の途中では、争点がいっぱいあるのに裁判官が何を考えているのかよく分からず、争点を整理せずに、とにかくへとへとになるまで言い分を言わせるだけ言わせた末に、言い渡された判決を見て初めて裁判官の考えが分かり愕然とする。「そんな風に思っていたなら最初から言ってくれよ!」となります。

際どい事件については、裁判に突入する前に AI の判断を仰ぐことができ、見込みが正確に分かるようになるのであれば、果たして本当に裁判に持ち込むべきなのか、予測を立てやすくなると思います。そうすれば不毛な根性比べをしなくて良くなる。食いつぶされる弁護士も増えそうですが…。

ちなみに、契約書のチェックに関しては、既に AI を活用した民間のサービスが始まっています。確かに誤字の修正や、定番のチェック項目は AI が指摘してくれるので大変便利だと聞いています。しかし、今のところ私は使っていませんし、できれば今後も使いたくないと思っています。

吉田兼好の「徒然草」にこんな一説があります。

「ある人、弓射ることを習ふに、諸矢をたばさみて、的に向かふ。師のいはく、

「初心の人、二つの矢を持つことなかれ。後の矢を頼みて、初めの矢になほざりの心あり。毎度、ただ、得矢なく、この一矢に定むべしと思へ。」

懈怠の心、自ら知らずといへども、師これを知る。

この戒め、万事にわたるべし。

私、これでも学生の頃に弓道部に入っていたのですが、弓道では、右手で1本の矢を引くときに、薬指と小指にもう1本を挟むことが

あります。師範代がいうには、それではもう1本の矢があると思って、今引いている1本に気合いが入らなくなる。だから後がないと思って1本だけ持ちなさい、という戒めです。

私は全く的に当たらないので早々に弓道をやめてしまいましたが、この一説は好きなフレーズです。AI が見てくれているから適当でいいのではないかな。そんな懈怠の心を持たないようにするため、契約書は自分の目で見てしっかり考えたいと思います。契約書一つとっても、取引の背景となる事情や、依頼者の立場等、オーダーメイドで考えなければならない色々な背景事情があります。いわんや裁判となればなおさら、ということになりますね。

どうしてもデジタルの話になると、横文字が増えてよく分からない。ということで、強引に江戸時代の話を変えながらお話して参りました。江戸時代の裁判を見てみると、今日はお話できませんでした。なる程なかなかよく出来ているなと思うところもあります。

司法の世界でも、先進の技術と古き良き伝統をうまく融合して、より良い制度ができていくと良いなと思います。



SAA 担当 竹内公一さん

出席報告

発表：川合広高 出席副委員長

会員数	43名
出席者数	22名
出席算定会員数	35名
出席率	62.86%

前々回出席者数	43名
修正出席率	100%

SDG's ポスター審査会

** 表彰式 **

日時：1月25日（水）17:00

会場：クリエート浜松

